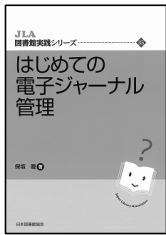




日本原子力研究開発機構機関リポジトリ
Japan Atomic Energy Agency Institutional Repository

Title	書評・新刊紹介「はじめての電子ジャーナル管理」
Author(s)	熊崎 由衣
Citation	情報の科学と技術,68(3), p.141
Text Version	出版社版
URL	https://jopss.jaea.go.jp/search/servlet/search?5061393
DOI	https://doi.org/10.18919/jkg.68.3_141
Right	情報科学技術協会



はじめての電子ジャーナル管理

保坂 睦著

出版社：日本図書館協会

2017年7月発行 241p B6判

ISBN 978-4-8204-1705-7

本体 1,800円＋税

電子ジャーナル業務を引き継いだばかりの春、「OUPの Radiation Protection Dosimetry, アクセスエラーって電話がこっちにあったけど activate した？」と前々任者に言われたことを、本書を手にとって思い出した。Oxford University Press だと即座に察せず、一文が伏せ字だらけに聞こえた。わかるのはただ読めないということだけである。1年目はひたすらに略称や専門用語を覚え、アクセスエラーの電話を怖がり、契約手続に汲々としていた。

本書はそんな初任者を対象として著された、大学図書館等における電子ジャーナル管理についての実務的な解説書である。電子ジャーナルに関する概説書や報告書、動向レビューはあるものの、実務に関する図書は管見の限り見受けられない。電子ジャーナルの実務を取り扱った解説書という点が、本書の大きな特徴だと言うことができる。想定する読者は大学図書館員等とのことだが、研究機関における業務においても十分に参考になる。著者の保坂氏が JUSTICE (大学図書館コンソーシアム連合) や所属先の私立大学での勤務経験を活かし、電子ジャーナル業務を包括的に記述されているからであろう。

構成は「基礎編：電子ジャーナルを扱うための前提と基礎知識」「実践編：電子ジャーナルを扱ってみよう」の2部となっている。基礎編は電子ジャーナルの概要と要点が簡潔に記されている。実践編は電子ジャーナルにおける各業務のイベントごとに章立てし、更に小さな業務単位に落とし込んで小節を設けている。加えて、コラムや用語解説、索引も充実している。電子ジャーナル業務は略語やジャーゴンが多用されるが、初任者にはこれに慣れるまでが大変である。目次や索引からも、初任者が探したい情報にたどり着けるような配慮がなされていると感じた。また、コラムや参考文献によって、基礎の習得からもう一步踏み込みたいニーズまで満たすことができる。

実践編が本書のメインとなっており、電子ジャーナル業務を「情報収集→意思決定→発注・契約・支払→設定→利用開始・広報→トラブル対応→評価」というらせん状のライフサイクルとして総括し、記述している。ひとことで管理といっても、組織内の予算や意思決定のための調整から出版社や代理店との交渉、例えばブラウザの設定のようなエンドユーザーへの細々とした対応まで、相手先も業務内容も多様である。実践編ではこれらの業務を幅広く解説している。更に、「～を説明しなければならぬ状況に陥った際にも役立つかもしれません。」といった経験に基づく記述

が随所に見られ、具体的な知見を得ることができる。

あとがきに『EJ 契約って“だいたい”こんな感じですよ、記録は残しましょう、誰かと協力したほうがいいですよ、あれこれ大変だけどおもしろいこともありますよ』をなるべく平易な表現で伝える」と記されているとおり、実践編には「記録」「確認」という言葉が散見される。“過去の経緯”は担当であれば一度は経験しているであろう、思わぬトラブルやアクセスエラーのきっかけになる、厄介な火種である。記録はリスクマネジメントですよ、と、にやりとしてしまった。また、電子ジャーナル業務は、商慣習や各機関の契約手続きといった様々なルールのなかで、内外の関係者と適正に“うまくやる”ことが求められる。そのために、必要なタイミングで必要なデータを取り出せること、そのデータを検証すること、結果を共有して協力を仰ぐ(そしてなんとか調整する)ことが重要だと実感している。記録することは他者と情報を共有することに繋がり、確認して次の計画を立てる手がかりとなる。らせん状のライフサイクルは個別の業務の PDCA サイクルのうずをくるくると回しながら成り立つものであろう。記録と共有、協力は不可欠であり、これらなくしては業務の進展に繋がらない。実践編で繰り返し記される「記録」「確認」は当たり前だけれど重要な事柄を、丁寧に伝えてくれている。

私事ながら、図書館(における雑誌業務)はバイヤーに過ぎないのだろうか、などと悩ましく思う出来事が多い。筆者は電子ジャーナル業務を「常に学術コミュニケーション動向の最前線を見据え、最新情報をキャッチし、その複雑な状況を学内に反映させていく」と位置付けている。世界に目を向けた広い視野を持ち、けれどローカルな手続に則って足元を着実に固めることも、また同時に求められる業務なのだ、手元だけ見ている訳ではないのだと、目をひらかれた。意思決定や予算調整、財務処理、種々のリスクなど、もう少し読みたいと感じる部分もあるが、所属機関で業務するなかで経験を積むべきことなのだろう。結びの小節は、「ひとつひとつの業務を有機的につなげ、利用者に的確なコンテンツを届けることができたときの喜び、そしてこれまで積み重ねた経験や知識や人脈など、担当者として得られる(た)ものもたくさんあることを忘れないください。(略)それらは必ずや今後のキャリアの糧になることでしょう」と締めくくられている。本書は電子ジャーナル業務の先輩からの惜しめないノウハウの提供と励ましのメッセージに満ちた一冊である。

自機関での電子ジャーナル管理のライフサイクルのらせんは自分で作りだすほかない。本書はその心強い伴走者になってくれる。

(国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 熊崎由衣)